

NPO法人 八木まちづくりネットワーク

講演:2023.03.11
景観まちづくり講演会

明治19年のロックダウン

—北八木村のコレラ感染をめぐる—

講師/奈良大学文学部史学科 日本近代史担当教員井岡康時

コロナのロックダウン

コロナ禍での都市のロックダウン(封鎖)といえば、中国の「ゼロコロナ政策」により武漢ではじまり、最近まで上海や北京の大都市で行われました。

上海市の面積は5300km²で、奈良県の約1.5倍と広大です。一体どうやって封鎖したのでしょうか・・・さすがに上海市の一部の地域であると思われます。

同じようにコロナの流行りははじめには、ロンドンやパリ、ニューヨークなど欧米の大都市のほとんどでロックダウン、つまり完全に人の出入りを止めてしまいました。よって許可なく出歩くと逮捕されたり罰金をとったりと「法律」で厳しく取り締まりました。いっぽう日本は、欧米・中国とは違いあくまで「政府のお願い」で自粛を求め、人の流れを止めました。このことは世界を大変驚かせました。これはいったいなぜかも今日のテーマのひとつです。

明治19年北八木村のロックダウン

南八木町の八木醍醐共同墓地に「吊祭疫死者之碑」【ちょうさいえきししゃのひ】の石碑があります。「吊祭」とは弔い祀るという意味で、疫死者の霊を祀るための碑です。裏になぜこの石碑を建てられたか書かれています。確実に読めるところだけ揚げます。できれば拓本をとって全文が明らかになることをお薦めします。

裏面最初の行に「明治十九年七月虎列拉病特発」、虎が列をなして拉致するのとごとき恐ろしい表現です。明治19年7月にコレラが「特発」(＝突発)したという意味と思われます。

3行目に「今十七年有志者相謀」、最後の行に「明治三十五年七月十日大字北八木有志者」。つまり明治35年、17回忌に際し有志らで慰霊碑を建てたということになります。

コレラとはどんな病気

現在、コレラはもうみない時代で、大学時代の友人の医者に聞いてみても、医者歴30年にしてコレラ患者には出会ったことがないと言っていました。

厚生労働省のホームページによると、コレラとは



南八木町の八木醍醐共同墓地に「吊祭疫死者之碑」の石碑



講演会ポスター デザイン:末田まみ

講師/井岡康時
奈良大学文学部史学科 日本近代
史担当教員
1954年生まれ。奈良県立高等学
校教諭、奈良県立同和問題関係
史料センター勤務を経て、現在奈
良大学文学部史学科で日本近代



コレラ菌による急性感染性腸炎。潜伏期間は数時間から5日、通常1日前後で発症する。近年のエルトールコレラは軽症の水様性下痢や軟便で経過することが多いが、“米のとぎ汁”様の便臭のない水様便を1日数リットルから数十リットルも排泄し、激しい嘔吐を繰り返す。

とあります。つまり脱水症状によって命を落とす病気です。

このコレラ患者を救う方法は水分を採らせることなのですが、コレラにより胃腸の粘膜がだめになっているところに、単純に水飲ませてもすぐ出てしまい助けられません。そうすると静脈への点滴を行えばいいのですが、医者の中に点滴が広がるのは20世紀になってようやくといった状況でした。細い針はあったが、そこにさらに細い管を通すことはできなかったからです。

明治時代の医者達の報告によると、「コロナ患者に対して蒸留水に塩を入れて注射器で静脈に入れたらあっという間に直った。がまたすぐ悪化し死んでしまった。」とあります。・・・この直接注入とは現代医学では考えられない危ない治療で、やはりじっくり点滴で水分を送り込む必要があるわけです。

20世紀になって多くの医者が点滴の技術を獲得すると、コレラは怖い病気ではなくなりました。水分さえ補えば命が助かる病気になりました。

コレラの日本上陸の最初は江戸時代の終わりの文政5年と安政5年の2回です。このころ事実上の鎖国が崩れ、国の外から病気が入ってきたわけです。

明治時代にはさらに2回コレラの大流行があります。明治12年と15年です。明治期の流行では15-6万人が感染しその内10万人が死ぬ、つまり6-7割の死亡率です。今のコロナの死亡率が0.数%と言われているので、コレラがいかに恐ろしい病気かが分かります。21世紀に入ってアフリカの西部での「エボラ出血熱」の死亡率が20%だったのに対してWHOが世界中から医者や薬を集めて押さえた例を見ても、6-7割の死亡率はすさまじいことでした。

北八木村でコレラが流行る3年前、明治16年にドイツのコッホ(細菌学者)が、コレラはコレラ菌という細菌で起こると原因を突き止めていました。コレラの正体は判明していたのですが、インターネットもない時代、情報も治療法もなかったので多くの死者を出すことになりました。

地域の歴史的背景

今の北八木町の江戸時代のいい方は、十市郡北八木村で、中街道と初瀬街道の交差点にある古くから商業が盛んなところでした。

「村」ですので、そこに住んでいる以上「百姓」の身分であるので、田んぼを耕していない人もみな年貢を払っていた、そんな村でした。

慶応3年の記録で、北八木村は家数197軒の内借家は140軒とあります。借家の多さに注目してください。借家があるということは、村外から多くの人々が商いの盛んな北八木に職を求めて集まってきていたということです。

借家住まいが多いということは、伝染病にとって重要な問題をもたらします。借家は密集して住んでいることを示します。借家では井戸、台所、便所を共有していて、感染症に弱い条件が揃っていたということです。

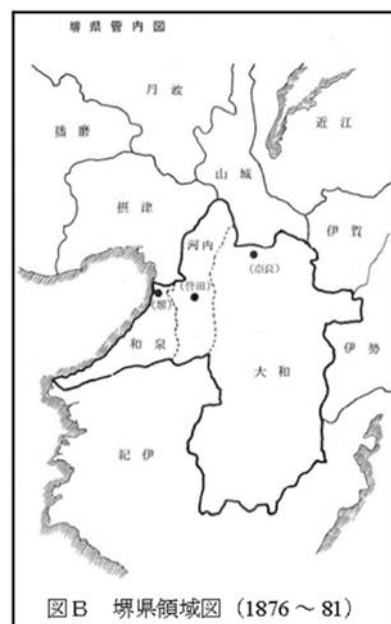
北八木村の南に高市郡八木村がありました。明治13年、南・北八木村の合併の願いを出しましたが、大阪府は許可を出しませんでした。なぜかというと、北八木村は十市郡、八木村は高市郡で、初瀬街道を挟んで違う郡でした。郡には郡長がいて行政を行っていた時代、合併後どちらの郡に属するかの問題は簡単でなかったのが許可されなかった理由です。

町村合併

明治17年地方制度の変る時代「連合戸長役場制」の実施で北八木は第19戸長役場に、八木は第13戸長役場にありました。明治22年(1889)町村制が行われ全国一斉に町村合併が行われました。

江戸時代には全国におよそ7万の町や村があり、それぞれが非常に自治自立の精神が高かったとされています。江戸時代といえば、武士が威張って町民を操っていたイメージがありますが、実際は、領主は庄屋に領収書を持って行き、庄屋はその分の年貢を集めて12月に領主に納めていました。年貢さえ納めて一揆など起こさなければ、庄屋が何をやろうと好きにやっていいという、当時の日本は地方分権型の国だったといえます。

しかし明治になると、東京の中央政府が笛を吹いたら全国民がそれに従うような国にと、方向転換したのです。なぜかという、欧米列国が中央集権制の国をつくり、それらが著しい発展を遂げていたのを見たからです。西郷隆盛、大久保利通、高杉晋作、坂本龍馬らがそれを目指そうと幕府を倒すこととなったのです。よって7万の自治の力は政府には困った存在なので、それらを合併させ中央集権を進めた結果が明治22年の町村合併即ち「明治の大合併」で、北八木村や八木村等が合併し八木町が成立します。昭和24年にはさらに内膳村を編入し、同31年橿原市が成立します。



奈良県消滅

少しややこしい話ですが、奈良県は明治4年廃藩置県で成立しますが、財政能力の弱い県は強い県に吸収合併させるとの政府の方針で、隣の堺県に併合、リストラされました。よって明治9年に奈良県が地図上から消滅してしまいます。

今の大阪府は、昔の国名で摂津国・河内国・和泉国の三つでできていますが、明治の初めには河内と和泉を合せて堺県が置かれ、今の摂津の東半分が大阪府でした。

奈良県は堺県に吸収された後、明治14年大和国を含んだまま堺県は大阪府に併合され、歴史上最も広い大阪府が誕生します。

ところが、大阪府の下は嫌だと運動が起き明治20年奈良県が再設置されます。よって、明治19年には、北八木村は大阪府だったということです。

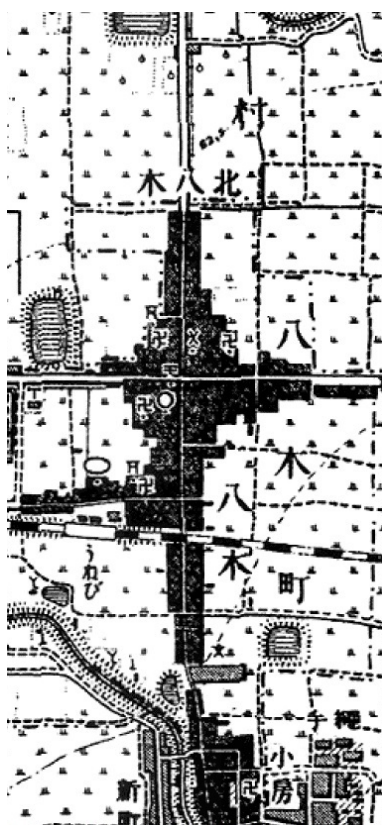
八木村河合家文書

2020年に奈良大学に勤務し出した頃に、かつて奈良大学が古書店から入手した「大和国高市郡八木村河合家文書」の塊が倉庫に棚晒しになっているのをみつけました。その中にコレラの資料を下に論文を書きました。この八木村河合家文書と明治19年『明治十九年大阪府管内虎列剌病流行紀事』(国立国会図書館デジタルコレクション)を下にこれから話をします。

明治19年一どのような時代であったか？

高校の日本史教科書を開いてみると、明治14年10月に松方正義が「松方財政」を開始します。当時インフレだったところに緊縮財政をしたわけですが。財政は立ち直ったのですが、明治17-8年頃は「自由民権運動」花盛りの時期で反政府運動が起きます。

明治18年6-7月、降雨激しく各地で洪水が起きます。中でも「淀川の大氾濫」



明治41年測図 大和八木
今昔マップ on the web

の折に大和国でも大和川が氾濫し、奈良盆地で洪水の被害が多発します。

以下が明治19年5月大和国の高市・葛上・葛下・忍海四郡の郡長の訓示です（「奈良大・河合家文書」）。

勤勉貯蓄奨励の義については(中略)、追々諭告の次第もこれあり候処、(中略)生計は日一日より困縮し、餓死に瀕する者続々増加し、その惨状実に見るに忍びざるなり、そもそもこの原因たる種々あるべきも、当地方の如き懶惰【らんだ】(＝なまけ)の致す所またその一大原因たらざるを得んや、(中略)今や時気追々暑に向ひ人々倦怠を催すの日に当り、かの嫌忌すべき午睡のごとき特にその萌芽を現さんとす、(中略)希くはこの際町村申し合わせ規約を設け旧習を蟬脱【せんだつ】(セミの抜け殻転じて、抜け出すこと)し、各自奮って勉励候よう懇篤奨励いたすべし、この旨訓示候事

当時、農村部では昼寝(午睡)はよく行われていたので、そんな週間をやめて働けよというわけです。不景気、洪水、そんなときにコレラが発生したわけです。

明治19年3月の大阪府の警告(大阪府諭第3号を発令)です。

本年一月一日以来虎列拉病患者は日々絶へずして本月(3月)十三日までに百拾余名に及び、腸室扶斯【ちふす】患者もまた多数にして、すでに七百名を超へ、これに加え常年に少なき発疹室扶私も四百五十余名に上りたるは近年稀なる伝染病多き年柄と謂ふべし

その原因として、

昨年洪水の侵入したる町村においては床下の土壤湿潤となり、これが為に床下に集堆せる塵芥等よう腐敗して病毒を醸し、断へず屋内に蒸発して、知らず知らずにその毒気に触れ冒され遂に発病するに至るものにして、即ち昨年の洪水病毒の種を蒔き今年に至てその萌芽を発生する者ならん

昨年に洪水により種を蒔いて今年になってそれが芽を吹いたとの今からみるとはおかしい内容です。

明治19年の5-6月に暑くなってコレラが流行り、結果、明治19年の大阪府(大和国含む)の感染者数＝1万9709人、死者＝1万5968人、死亡率＝約81%と日本の平均69%に比してもすさまじい事態になりました。都市部の人口密集地でたくさん死ぬことになったわけです。

明治19年6月頃から大和国全域に感染が拡大します。下は死者数の上位3位までの町村別の状況です。

十市郡田原本村(現田原本町)6月3日～11月1日患者98死者72

十市郡北八木村(現橿原市)7月19日～8月23日患者99死者70

十市郡桜井村(現桜井市)6月25日～10月5日患者67死者49

葛上郡御所町(現御所市)6月20日～10月19日患者58死者49

北八木村ではわずか1ヶ月の間に異常な発生したことがわかります。当時の北八木村の人口は857人。1カ月で人口の11.6%が罹患し、8.2%が死亡です。大阪府が、北八木村は特別ととらえ「北八木村をロックダウンせよ」となりました。

当時はロックダウンに「交通遮断」という言葉を使いました。まず明治10年(1877)年8月に政府は「虎列刺病予防法心得」を出します。

コレラ患者が出た家の門戸に「虎列刺伝染病アリ」との貼り紙を出して、なるべく人の交通を断つこと。(現代語訳)

続いて明治12年6月政府は「虎列刺病予防規則」を出します。

コレラ患者が出た家には、その病名を大書して門戸に貼り出し、やむを得ない事情がある場合を除いて人の出入りを謝絶すること。(現代語訳)

患者差別が起こりそうな措置ですが、やがてもっと広範囲に遮断が必要と判断し、明治13年7月政府は「伝染病予防規則」を出します。

コレラが町や村において蔓延し、これが他の地域に広がらないよう遮断できると考えられた場合は、府県知事は政府と相談の上、交通を断つ処分を行うことができる。(現代語訳)

さらに、明治15年「伝染病予防規則」を改正し貼り出しを不要にします。

コレラ患者が出た家の門戸に病名を貼り出す措置は実施しない。(現代語訳)

当初は個別の家に対する交通遮断をしましたが、のちに患者が多発した地域全体に対する措置へと変化していったのです。

明治19年大阪府による交通遮断措置が行われたのは、西成郡の3カ村、若江郡の1カ村、大和国では平群郡の1カ村、十市郡で北八木村と他1カ村(今の桜井市内)で、明治19年8月13日付『大阪朝日新聞』でその交通遮断の内容が記されています。

交通遮断(中略)一人の虎列刺新患者を発したらんには検査委員直ちに該処に到り、その模様及び戸数の多少を見はからひて直ちにこれを実行し、その裏の出入口に巡查を立てて一切人民の出入を禁じ、その裏に井あらばその水の使用をも禁じて区役所より各戸に配附する水を使用せしめ、毎日の食料も皆区役所よりそれぞれ付与せらる(下略)

共同の井戸の危険性、役所から水や食料を配布し、その代り家を出ないようにと記されています。

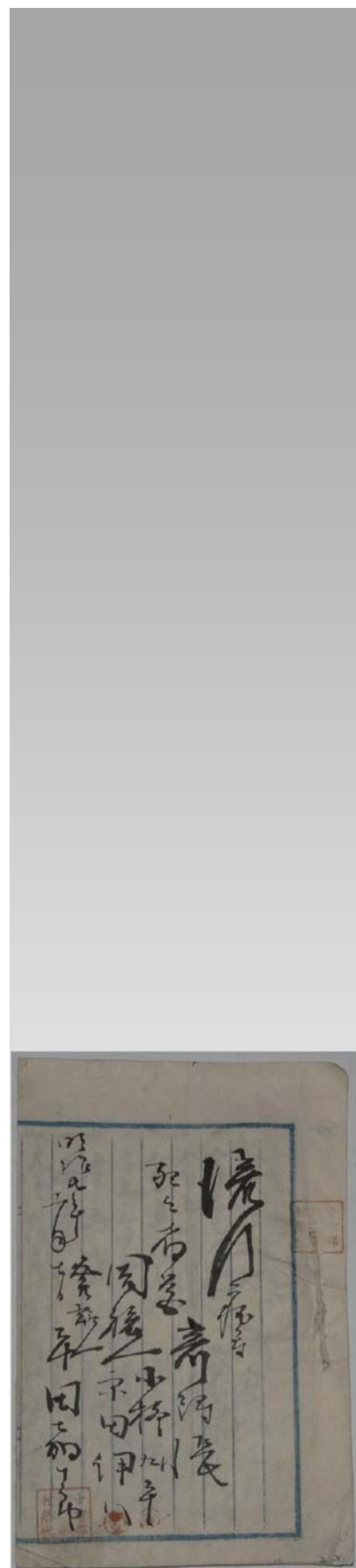
北八木村は、明治19年8月4日～21日まで交通遮断処置を受けます。隣接する八木村の患者発生数はたった6名に対し北八木村は99名。両村の様子は商い中心で借家が多いと言った意味で同じ状況だったのに、なぜこのような違いが生まれたのかと大阪府も注目しました。

明治19年8月9日付「大阪府告諭」(「奈良大・河合家文書」)にこうあります。

吾邦には旧暦七月に生霊祭と唱へ団子、牡丹餅、冷素麺、西瓜、そのほか種々の飲食物を仏前に供へ、或は他家と遣り取りをなし飲食するは一般の仕来【しきたり】なれども、今年の如き悪病流行の時は、少しの飲み過ぎ食ひ過しも、たちまち悪病の元となるは毎年の例によりて疑ひなきことなり(中略)、本年の如きも大和国十市郡北八木村に一時沢山の病人ありしは全く同村の天頭祭【てんとうさい】に種々の飲食を過せしが基となり、そのほか、ここかしこに汎発するも或は病人の宅へ往き、或は病人の家より人の来りて自然病の毒を貰ひ受けたるもの最も多し

食べ過ぎる、飲み過ぎるからだ、病気の流行っているときに宴会はだめなのに天頭祭を行い、行き来したせいではないかと記しています。

北八木村の「天頭祭」について、何かご存知の方いらっしゃいましたらお教えてください。愛宕祭は有名ですが、天頭祭とは呼ばないはず。ただ伝言ゲームでありもしない「天頭祭」は創出されたかも知れませんが・・・。



M20流行病二付寄附帳(東の平田家文書)



明治21年合併願書 両八木合併二付諸類
入「八木町全図」(東の平田家文書)

というわけで、ロックダウンが行われた北八木村でわずか一ヶ月の間に99人の患者の内70人が亡くなられたとは、当時の人は驚かれたでしょう。その恐ろしい出来事が八木墓地の石碑に残っているわけです。

おわりに

廣吉壽彦・谷山正道編『大和国高瀬道常年代記』(清文堂、1999年)には高瀬家の当主が詳細な日記を残していて、その中で北八木村では交通遮断が解除された後も、しばらくは「恐れテ通行セズ」(下巻643頁)という状態であったと記されています。

また「奈良大・河合家文書」によると、コレラによる死者が増加したため、飛鳥川の対岸に墓地を持つ今井町と共同で火葬場を設置しようという計画が持ち上がったそうだが、今井側は、北八木村のように多くの患者が出た村と一緒に火葬場にすると感染するかもしれないとして、この計画に反対したということです。

当時はコレラで亡くなった人を火葬したときの煙を怖がって逃げたということもあったそうです。

こうして合せて20万人がコレラで亡くなった後、政府が検討し出した結論は、強権的な地域封鎖＝交通遮断(ロックダウン)は効果ないのではないかということでした。エネルギーとお金が必要な割に効果が薄く、政府よりも地域の衛生委員の力で常日頃の衛生に関する啓蒙活動をするほうが効果あるのではないかということです。

こうした考えは今回の日本政府のコロナ対策に結びついているのでは、と思います。軍隊まで出して都市封鎖し、食料を配る方法にはお金がかかるだけで、自治の力に頼る方が安く付き合理的ではないかとの結論に結びつくわけです。住民の自治の力に頼ろうとしたわけです。

最近の東南アジアの自治の力を比較した研究によると、日本はかなり自治力が強い国であると思われます。韓国や中国ではそうではなく、いっぽうベトナムと日本は共通するものがあることがわかります。各国から来る外国人技能実習生の中でとりわけベトナム人が長続きする理由に自治に関する同じような考えがあるかも知れません。ただし、コロナ禍で自粛警察が出回ったようにお互いが取り締まるというとてもない事態をみるに、現代に繋がる問題を明治19年にも見出すことができます。

本日の講演で述べた内容の詳細は、井岡康時「一八八六年のロックダウン—大和国十市郡北八木村におけるコレラ感染をめぐる覚書—」(『奈良史学』39号、2022年)を参照してください。インターネットでも全文を公開しています。

テープ起し 稲上文子

NPO法人八木まちづくりネットワーク

電子メール: info.yaginet@gmail.com

HP: <https://yagimachi-net.jp/>

※無断転載はご遠慮下さい。

講演と配布資料に基づき、また谷山先生のご指導を得て編集しています。注釈は編集者編記、特記なき写真等はNPOメンバー撮影やフリー素材を利用しています。不行き届きなどあれば、ご教授お願いいたします(080-3800-5650)。

